
禁忌の鳥居

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁忌の鳥居

【Nコード】

N8364E

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

一度見た夢が悪夢のような日々繋がりうとは誰が思おうか……

Prologue: 悪夢ノ始まり

「いーち、にーい、さーん、しー……もういいかい？」

「まーだよ」

新緑の中に子供達の声が木霊する。

木々が生い茂る神社の周りは子供達にとって絶好の遊び場。この島には都会と違って何も無いが、こうやって木々の中を駆け回ったり、探検したり、それだけで子供達は皆満足していた。

「もういいかい？」

「もういいよー！」

かくれんぼの鬼になった少年は、木々の間を小走りで駆け抜けながら、隠れている友達を探す。

そんなに遠くには行っていない筈なのに中々見つからない。少年の額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

急に寂しさに襲われ、半ベソをかきながら少年は必死に悪友達の姿を探す。遊びのレベルではないほど、少年は焦っていた。

——ふと、景色が開けた。

其処にあったのは小さな祠。そして、其れにあわせて作られたかのような小さな鳥居。

鮮やかな鳥居の‘赤’色は綺麗というより不気味な表情を持っていた。

「…ん。…くん…健一くんてばっ！」

隣の席の少女に起こされ、健一は目を覚ました。

「あーあ、結局誰も見つからなかったなあ。」

「ちょっと！何寝ぼけてるのよ！もう放課後よ、放課後！！」

健一は半分夢の中に居るような状態で、ふらふらと腰を上げる。

まだ夢の中の感覚から抜け切れない。

新緑の中の心地よさと、寂しさから来る焦り。相反するような2つの感情を味わえた不思議な夢は、健一にとってどこか懐かしいものでもあった。

健一はまだ知らない。

この夢が、覚める事の無い悪夢への入口だということを――。

第1話 夢ノ切レ端

田宮健一。中学3年生。今は受験勉強の真っ只中で皆カリカリと苛立っているというのに、この少年だけは5時間目から放課後まで約一時間半もの間爆睡していたのであった。

「もう、すっかりしてよね。起こしても健一君たら起きてくれないんだもの。」

帰り道を一緒に歩いている少女の名は田村苗。健一の家隣に住んでいて、学校でも席が隣である。

「だって眠かったんだぜ？俺、勉強のしすぎで疲れちゃってさー。」

「嘘言うんじゃないやありません！勉強なんて殆んどしないくせに。それでいて学年トップなんだから嫌んなっちゃうわ。私なんか真面目に勉強してるのが馬鹿馬鹿しくなってくるもの。」

苗は頬をぷくつと膨らませた。

健一は学年で1位の成績で、苗は2位である。いくら勉強しても健一に追いつけない苗は、受験より健一を抜かす事を目標としていた。しかし、この島の学校で学年トップというのは都会の学校から見たら大したことではないのかもしれない。何故なら、一学年は女子6人、男子12人の計18人しかいないからである。

因みに、学校の生徒数は3学年合わせて34名しか居ない。

「あら、どこかで蝉が鳴いてるわ。」

さっきまで頬を膨らませていた苗は、遠くから聞こえる蝉の声を聞

き、嬉しそうに耳を澄ました。

「え？ 蝉？ 全然聞こえないぞ？」

「しーっ。ほら、聞こえるよ。山のほうから。」

苗にならない健一も耳を澄ませると山の方から微かに蝉の声が聞こえた。

「ね、聞こえたでしょ？ 私ね、蝉の声を聞かないとどんなに若葉が生い茂っても夏って感じがしなくてさ。」

えへへ、と笑う苗につられて健一も笑顔になる。

辺りには緑が生い茂り、初夏の香りが立ち込めている。夕暮れの空を横切り、烏が寢床である山へと帰ってゆく。

学校で「受験、受験」と捲し立てる先生の騒々しさも、生徒達の焦りと苛立ちも、この風景を見れば全部夢だったかのように思えてしまいうくらい、長閑な風景である。

そんな中にも、健一は先程見た夢を忘れる事が出来なかった。

「ところでさ、俺さっき不思議な夢を見たんだけど……」

「はいはい、さっき寝てたもんねー。で、どんな夢？」

興味深そうに苗が健一の顔を覗き込む。健一はすぐ目の前に来た苗の顔にドキッとしながらも、それを隠すように夢の事について話し始めた。

新緑の中に木霊する声、かくれんぼで鬼になった自分、誰も見つけられず、焦りのあまり駆け出して、その先で見つけた小さな祠と禍々しいくらい赤い鳥居。

「俺さ、どうも夢と思えないんだよねー。何か昔の記憶っていうか……あの神社はこの山の中腹くらいにあるやつだろ？ ってことは、あの祠も——って、苗？」

健一の話を黙って聞いていた苗は、下を向いたまま何も言ってくれない。健一が何度か名前を呼んでみたが俯いたまま何も言わない。

「苗？ おい、苗！ ！」

「くすくすくす……」

苗の口から不気味な笑が漏れる。何かを勘繰られ、それを認めて開き直るような、ひどく耳障りな笑い方。健一は直感で身の危険を感じ、後ろへ後ずさりした。

苗はまだくすくすと笑う。下を向いたまま、健一にはその表情を見せないで。

「な…苗？」

「くすくす…あはははは！ ！ 健一君っておかしーい！ ！」

本気で怯えている健一を見て、苗は急に腹を抱えて笑いだした。健一は呆氣にとられ、何が何だか分からないという表情をしている。

「可笑しすぎるよ、夢の出来事は信じちゃうしさ、私が悪ふざけであんなことしただけでビビッてるし、あははは、可笑しすぎ！ 」

畜生、と健一は思った。要するに自分は、からかわれていたただけなのだ。今頃になって気付く。恥ずかしさで、自分でも顔が赤くなっ

てゆくのが分かる。その様子を見て、また苗が大笑いを始めた。

「あーあ、顔真っ赤にしちゃって。結構健一君って怖がりなんだね？あ、ちょっとからかい過ぎちゃったかな？」

「うるせー。それよりお前の家ここだろ？ほら、帰った帰った。」

気が付くと、もう苗の家の前だった。健一が煩そうに手の甲を向けてヒラヒラと振ると、苗はにっこりと笑って小走りに玄関に向かって駆け出した。

「ふふ、じゃあね、怖がりの健一君。」

途中でくるっと健一の方を振り向き、良いものが見れたと、苗は満足そうに家の中へ入って行った。

「ちえ、なんだよ。」

そう独り言ちて、健一は数十メートル離れた自分の家に向かった。

第2話 幼子ノ記憶

「ただいまー。」

「はい、おかえりなさい。」

健一が気だるそうに玄関の戸を開けると、土間で祖母が草履を編んでいた。健一は、祖母の横を通り、バタバタと自分の部屋へ向かう。

「こら、健一。履物はちゃんと揃えなさい。それともっと静かに歩け。」

厳しいが、優しい口調で祖母がそう言うと、健一が踵を返し祖母の隣に戻ってきて履物を揃えようと、祖母はうんうんと頷いた。

「父さんは？」

「まだ帰ってない。本土の方に米の買い付けさ行ってる。」

健一の住んでいる島——稲櫛島では米が採れない。

土地が悪いのか、気候のせいなのか、米を栽培しようとしても上手く育たず、僅かしか採れない。しかし、この島の住人の苗字には皆「米」という字が入っている。色々な説があるが、苗字に「米」という字を入れて、米の有難さを常に意識するようにしていたというのが有力な説である。

そんなわけで、健一の父は本土に行き、島民の為に米を仕入れる仕事をしている。それ以外の時は、本土の会社に勤めており、休日手が空いているときは島の漁師の手伝いをする。人柄もよく、近所の人からも評判が良い。そんな父を健一は尊敬していたし、誇りに思

っていた。健一が「父のようになりたい」と思うのは必然的であろう。

「ふーん、そっか。じゃあ帰りは遅くなるんだね。」

祖母が答える前に、健一は鞆と、卓袱台の上にあった煎餅の袋を持って、2階にある自室に向かった。

健一は自室に入り、鞆を床に放り出すと煎餅の袋と一緒にベツトに寝転んだ。煎餅を齧りながら、手元にある漫画本を読みだす。勉強机には一応参考書などが積んであるが使っている様子は無い。とても受験生とは思えないが、それもその筈である。何故なら健一は学校推薦がもらえる事になっていた。その関係で本土の私立校には確約がとれていたので、極端に言ってしまうえば受験とは無関係なのである。

健一は漫画本を読みながら、いつの間にか眠ってしまった。

「あ、お父さん」

それは夢の続き。少年の後ろにはいつのまにか父が立っていた。大きな手で少年を抱き上げる。

「何をしてたんだい？」

「んーとね、かくれんぼ！」

まだ、あどけない口調で少年が言うと、父はにっこりと微笑んだ。「そうか、もう友達が出来たのか」と言って、少年の頭を撫でる。

「お父さんは何してたの？」

少年の問いかけと同時に強い風が吹いた。木々がざわざわと揺れ、父の声がよく聞き取れない。

風が止んで視界が開けると、そこに父の姿は無く、少年は一人その場に残された。

あの祠と赤い鳥居と一緒に――。

「おい、健一。晩飯だぞー。」

今度は1階から大声で呼んでいる祖母の声で健一は目を覚ました。もうそんな時間なのかと、目をこすりながら居間へ向かう。そこには祖母と、そして父の姿もあった。

「お、寝坊助が起きてきた。」

健一の眠そうな顔を見て、父はそう言った。祖母はそれを聞いて遠慮なく笑う。

「まあ、健一の歳じゃ育ち盛りだ。よく食べて、よく寝ることが基本だべ？」

「そりゃそうかもしれないけど、勉強もしないとなあ？いくら高校が決まったも同然だからといって、寝てばかりじゃ…なあ、健一？」

健一は無言のまま黙々とご飯を食べる。勉強してないと言われると、正直耳が痛い。余程勉強が好きな人で無い限り、「勉強」の話題を

出されて嬉しい人はいないだろう。ましてや自分があまり勉強していない時に言われるのなら尚更だ。

そんな健一の心中を察してか、父と祖母は話すのを止めた。暫し無言。

「あのさ……」

沈黙を破ったのは健一であった。

「今日、同じような夢を2回見たんだよね。夢って言うより、うん。昔行った事ある場所のような気がして。」

「ほう？どんな場所だい？もしその場所が実在していて、気になるのなら行ってみるかい？」

「きっと、この島にある山だと思うんだけど。あそこにある神社じゃなくて、もっと奥に小さな祠みたいなのなかったっけ？」

一瞬だけ空気が凍りついたようにしんと静まり返った。

しかし、それが気のせいであるかのように、話は明るい雰囲気ですぐに再開された。

「へえ？そんな場所がこの島にあるのかい？」

「わたしや聞いたこと無いねえー。」

二人は健一に遠まわしに其れはただの夢であると教えた。しかし、健一は自身の記憶のような夢の事をただの夢と言われても納得がいかず、更に先程の違和感のある間も、彼の疑いに拍車をかけていた。何かを隠されている気がする。健一はこの時はっきりとそう思った。

けれども心のどこかで期待をしていたのだ。
勘違いであってほしい――と。

健一は知らない。彼の疑問が核心に迫っているという事も、これから起こるであろう悲劇も、まだ何も知らない。いや、知る由なんて今はまだ無いのだ。

第3話 島二来夕日ハ

翌朝、健一が学校へ着き、玄関で下履きから上履きに履き替えていると、後ろから肩を叩かれた。突然のことなので、健一の肩がビクッと縦に動く。

「おはよーさん。」

「おはよう。クスクス、やっぱり怖がりなんだから。」

健一が振り向くと、そこには苗と田代悠樹が立っていた。悠樹は健一の親友である。健一がこの島に引越してきて、一番初めに仲良くなったのが悠樹なのだ。あの頃は健一と悠樹と苗も含め、この悪友トリオで小さな島の中を色々と探検してまわったものだ。

健一は転校生である。いや、「転校生」と言う言い方は語弊があるかもしれない。この島に来たのは、学校にあがる前である。

この島に来たきっかけは、父と母の離婚、そして健一の祖父の葬式のためである。

健一の父と母は上手くいっておらず、喧嘩が絶えなかった。そんな中、一番傷ついていたのは健一である。両親が醜く言い争うさまなど誰だって見たくはない。それを父も母も理解していた。言い争いながら家族3人で暮らすのと、家族がバラバラになっても言い争いの無い平穏な日々を送るのと、どちらが良いのか。両親はよく考え、その結果離婚した。

離婚した後、健一は父に引き取られ父と暮らすことになった。そこへ舞い込んだ祖父の訃報。

父と健一は慌てて島に戻った。‘戻った’というのは父にだけ当て

はまる表現であり、健一にとっては父の実家のある稲櫛島に来るのは初めてであった。よって、棺桶に収まり、冷たくなった祖父とも、皮肉な事にこの時が初対面であったのだ。

その後、父の祖母一人では心配だからと言う理由で、健一は父の実家に住む事になった。

祖父の葬式後も、線香をあげに近所の人たちがちよくちよく家へ来た。大人が集まれば、大人たちだけの話が始まり、子供は除け者にされる。健一は何となく疎外感を感じていた。ただでさえ、知らない島で、知らない人たちに囲まれていると言うのに頼れる父は客人の相手で健一を構ってはくれない。

そんな中、出会ったのが悠樹である。彼は祖父母に連れられ、健一の家に線香を上げにやってきた。大人が集まれば大人の話。彼もまた健一と同じような状況にいた。そんな二人が知り合い、仲良くなるまでに時間は掛からなかった。

それから二人はよく遊ぶようになった。いつの間にかそこへ苗が加わり、更に島の男の子達も加わるようになった。

苗は紅一点だったにも関わらず、男の子と同じように遊んでいた。男勝りで、姉御肌。それがあの頃の苗の印象だった。それがいつの間にか、女の子らしくなってしまったのだ。それは健一も、悠樹も疑問に思っていた。

しかし2人とも口には出さない。何か変化のきっかけがあったにせよ、ただ猫を被っているだけにせよ、年頃の女の子にそれを直接聞くのは失礼と言うものだ。

「なあ、悠樹。」

「何だ？」

健一は苗と出会う前から悠樹と一緒に居る。ということは、苗に覚

えが無くとも、悠樹にあの夢に出てきた祠の事を聞けば何か分かるかもしれない。

そう思い、健一は聞いてみたのだが、苗にはまた笑われ、悠樹にも笑われた。

「健一、お前気にしすぎだよ。第一、知ってると思うけど苗の家は先祖代々あの山の神社を管理してるんだぜ？だったら祠の事も知ってる筈だよ。それが知らないって言うのなら知らないんだよ。」

苗の家である田村家は先祖代々、この島で唯一の神社、稲櫛神社を管理している。

昔は姓が田村ではなく、田護だったらしい。僅かな田を守るため、豊作祈願をしたり、生贄を捧げたりしていた。しかし、時代は流れ、本土から米を仕入れられるようになると田護家は次第にその役目を失っていった。

遂には神社の管理と、年に一度の祭りを開く事以外の役目は無くなり、姓も田村と改めた。

「だよな…、俺気にしすぎなのかな？」

「だーかーらー、そういつてるでしょ！」

健一は、ぼーっと過ごし今日の授業の終わりを迎えた。

いや、今日は授業らしい事はしていない。明日から夏休み。今日は夏休み中の諸注意や、終業式、それと大掃除——嫌でもぼーっとしたくなる日である。

何はともあれ半日で学校は終わり、窮屈な世界から学生達は解放された。

いつもの帰り道を健一は苗と一緒に歩く。二人とも無言だ。

いつも夏休みと言えど、何をして遊ぼうかとかそんな話題で盛り上がっていた。

しかし、中学3年生の夏休みはそんなわけにはいかない。受験勉強に追われ、友達とも満足に遊べない。更に、この島の中学3年生達は、殆んどの生徒が高校は本土の学校へ行ってしまうため、この島でこの島の友達と過ごす最後の夏休みとなるのだ。

「あのさ、ちょっと家に寄ってかない？用事があるからさ、ね？」

沈黙をやぶり、苗が切り出した提案に健一は無言のまま頷いた。

1学期の終業式の日になると苗は必ず家へ寄れと言う。それはある特別な用があるから。

健一も嫌とは言わない。今日から夏休みの間、苗に会えなくなるのだから。

だから今日くらいは苗に付き合ってやろうと毎年のように思う健一であった。

第4話 不幸ノ知ラセ

健一が苗の家に付くと、土間にドラム缶バックが置いてあった。苗はにっこりと微笑む。

「ほら、何するかわかってるでしょ？」

健一は苗と荷物を交互に見遣り、苦笑いした。

「はいはい、わかってますよっと。」

適当に返事をして、荷物を持つ。そう、用とはこの事なのだ。

毎年この時季恒例となった健一の荷物持ち。というのも、苗は終業式の日の午後、船に乗って本土へ向かう。苗の話によると、この島の「祭り」に関係しているらしい。そんな事より苗は本土に住んでいる両親に会えることを楽しみにしていた。苗の両親は仕事で忙しく、中々会えないが夏休み中は一緒に過ごせるらしい。

「ふふ、健一君。毎年、毎年有難うね。ご苦勞様。」

苗の家から徒歩30分。港へ着くと、苗は健一から荷物を受け取りそう言った。

健一は首を傾げる。

「何だよ苗。お礼なんて、お前らしくも無い。」

苗はいつも、礼を口にしなかった。ここまで荷物を運んでもらっても、近所だから当たり前だとか、力があるんだから当然だとか、男の子なんだからこうやって筋力つけなきゃ、などと言って一度も健

一にお礼を言ったことがないのだ。
にも関わらず、今回に限って礼を言われると誰だって疑問を持ちたくなるだろう。

「ん、いつもお世話になってるし。今日くらいはお礼言ってもいいかなって。」

「そっか。じゃ、元気でやれよ？」

「うん、健一君もね？あ、そうそう——」

船の出向直前、立ち去ろうとする健一に向かって苗は叫んだ。

「お姉ちゃんによろしくねー！！」

苗を見送り、家に帰った健一は教科書と漫画を同時に広げボーッと過ごしていた。

明け広げた窓から生温い風が部屋へと入ってくる。苗の荷物を港まで運んだ疲れと、暑さで健一の思考は完全に停止していた。

と、その時——

ドスン！ガラガラガッシャーン！！

一階で物凄い音がした。その音で健一の思考は引き戻され、何事かと慌てて一階へ向かう。

その内、呻き声も聞こえてきた。そして、呻き声の主は台所に倒れていた。

「婆ちゃん！」

健一は声の主である祖母に駆け寄り、その身体を支えた。どうやら転んだ拍子に首と腰を強打してしまったらしい。苦しそうに呻き声を上げ、何か言いたげだが言葉にならない。

「待ってろ、婆ちゃん。」

祖母を横目に、急いで島で唯一の診療所に電話をかける。その足で苗の家へ向かった。

診療所は健一の家からだとは反対側に位置する。診療所の迎えが来るのを待つより、苗の家の人に頼み、祖母を診療所まで運んだ方が早いと考えたからだ。

苗の祖父に頼み車を出してもらおう。苦しむ祖母を健一と苗の祖父、2人がかりで抱えて車に乗せ、診療所へ向かった。

——診療所——

「それで、婆ちゃんの具合はどうなんですか？」

健一の問いかけに医師……乾田^{いぬいだ}は首を横に振った。

「腰を圧迫骨折しています。首を打つたと同時に頭も打ってしまっただけです。ほら、このレントゲンを見てください。頭の部分に内出血が見られます。もちろん首も。歳も歳ですし、余計に酷いの

でしょう。手当てをしたいのは私とて山々なのですが、ご覧の通りこの診療所の設備では十分じゃありませんから。本土に行けば設備の整った病院もあるでしょう。しかしながら船は出たばかりですし、本土までもつかどうか……」

そこまで言うと、乾田は健一に背を向けベッドに寝ている健一の祖母を見た。

「すみません、田宮さん……私に出来る事は何も無いんです。」

控えめに、しかしはっきりと乾田は健一に告げた。

‘本土までもつかどうか’と言う事は祖母の余命が僅かだということを表している。突然の出来事に頭が混乱している健一にもそれくらいのこととは分かった。

健一の脳裏に元気な祖母の姿が浮かぶ。ついさっきまであんなに元気だった祖母が突然こんな風になってしまうとは誰が思うだろうか。

「……ち……け……い……ち……」

途切れ途切れに祖母が掠れる声で健一を呼んだ。

健一は祖母の傍に寄り、力無く垂れている祖母の手を両手で握った。

「婆ちゃん！俺に出来る事があるなら何でも言ってくれ！だから頑張って、頑張って――」

健一は次の言葉を言う事が出来なかった。「頑張って、生きて」などと苦しんでいる祖母に言う事は出来るわけがない。まして余命が僅かだと本人も分かっているだろうに、「生きる」なんて言うのは残酷である。

そんな健一の心中を悟ったのか、祖母は苦しいながらも微笑み、健

一の手を弱々しく握り返した。

「ありがと……こんな良い孫……を……もって幸せ……だ……。一つ……だけ、お願い……」

「何だっけるから何でも言ってくれ!!」

「さな……え……ちゃん……を迎え……に……」

それを最後に祖母は何も言わなくなった。健一が握っている手が次第に冷たくなってゆく。

「婆ちゃん! 婆ちゃん!!」

健一がいくら祖母を呼ぼうともその声は二度と届くことはないだろう。

「ご臨終です……」

それを裏付けるかのように乾田が祖母の死を告げた。

第5話 アノ子ヲ迎エニ

健一の祖母が息を引き取ってから間もなくして父が病院へと駆けつけた。

父は自分が一足遅かったのを知ると祖母の死体の前で泣き崩れた。その横で健一はただ立ち尽くすことしか出来なかった。

余りにも突然の出来事で、現実を上手く受け入れることが出来なかったのだ。祖母を見詰める健一の目は恐らく何も映ってはいないだろう。ただ、その虚ろな目から涙がとめどなく溢れていた。

「健一、家へ帰ろう。おばあちゃんと一緒に家に帰ろう。」

泣き崩れていた父が顔を上げ、不自然なくらい落ち着き払った声でそう言った。健一は父の言葉をよく理解しないまま頷いた。

――自宅――

家に着いて健一がまず始めにした事は、祖母が倒れた場所に散乱する食器の破片を片付けることだった。

大きな破片を手で拾っていると、祖母が昔のように箒と塵取を持っ
て来て「健一、また皿割ってしまったんかいな。危ないからどいて
ろ。」と言って片付けを手伝ってくれるような気がして、と同時に
それはもう叶わない事なんだと気付いて健一は悲しい気持ちになっ
た。

ようやく止まった涙がまた溢れてくる。耐えられないほどの悲しみに襲われ、健一はその場で声を上げて泣いた。

父が健一に「もう片付けはいいから部屋に戻りなさい」と言い、健一に代わって破片を掃除し始めた。

部屋へ戻ろうと階段を登る健一の寂しそうな背中に父が声をかけた。

「健一、大事な話があるんだが……いや、後でもいいか。通夜とか葬式とか一段落してから話す。父さんが話すの忘れてたら、お前が聞いてきてくれ。」

翌朝、今日から夏休みだというのに健一はいつも通りに目が覚めてしまった。

外は昨日の出来事が嘘だと思えるくらいの快晴である。健一は小さな窓から外の風景を暫くの間眺めていた。健一の目に映る窓の外は、こちら側とは別世界のように見えた。

「健一、起きてるのか？」

下の階から父の声がする。健一は返事をする、部屋から出て階段を下りた。一階には線香の臭いが充満していて、昨日の出来事が事実だと言う事を雄弁に物語っていた。

「お婆ちゃんに線香をあげてきなさい。あとお水も。」

父は健一にコップに入った水を手渡した。健一はそれを受け取り、祖母の枕元に腰をおろした。

祖母の頭の所に置いてある台の上にコップを置き、その横に線香を立て、手を合わせる。祖母の顔には白い布がかかっているが、健一はそれを取る勇気が無かった。其処にある死体が祖母のものだと、顔を見たら認めざるおえない。健一は心のどこかにまだ祖母の死を

認めたくない気持ちがあった。

しんと静まり返ってしまった健一の家とは正反対に、外の時間はいつも通り流れていた。

朝早いにも関わらず、昆虫採取に行く子供達の嬉しそうな声が聞こえ、遠くでは波の音と船の汽笛の音が聞こえていた。

―汽笛……？もしかして―

「なあ、本土からの船って何時に着く予定だ？」

「んー、7時半。あと30分後か…」

健一は慌てて部屋に戻り港へ行くために支度を始めた。今日はあの子が来る日である。祖母の遺言をすっぽかすわけにはいかない。

「ちょっと港に行ってくる！！」

「ちょっと、健一！？」

健一は悲しみを振り払うかのように港へ向かって駆け出した。

健一が港に着く頃にはもうすでに船は来ていた。腕時計を見ると7時20分。走ってきたので20分で此処まで来れたが、船も予定より早く着いたらしい。

健一は船から待ち人が降りてくるのを待ったが、一向にその気配は無い。

―おかしいな、今日来るはずなのに……―

そう思ったその時、後ろから肩を叩かれ、まるでどこかの社長のよ
うな威厳たっぷりの声が聞こえた。

「健一君、今年も遅刻だねえ。」

健一が振り返ると其処には誰も居らず、待ち人はいつの間にか健一
の正面へとまわっていた。

「――なんちゃって。ふふ、元気にしてた？ 健ちゃん。」

「沙苗…さん！」

田村沙苗、田村苗の双子の姉である彼女は年に一度苗と入れ替わり
でこの島へ来る。それ以外の日は本土で両親と暮らしているらしい。
詳しい事は健一も知らない。

苗と双子と言う事は、健一と同じ年だということであるが、何故か
健一は毎年会ってすぐは敬語を使ってしまう。その度に、

「ほら、またそうやって敬語使って！ 久々に会ったからって余所余
所しいわよ。」

と言われてしまう。

「あーあー、何か水臭いわねー。せっかく同い年の友達が出来たと
思ったら毎年これでさ。」

「ごめん……。」

「あら、今年はやけに素直ね？」

いつもなら健一も色々と言い返すところだが、今回はそんな気にはなれなかった。

忘れられたくても忘れられない祖母の死、頭の片隅に追いやってもそれは一時的なもので、思考はすぐに、祖母の死、という事実には占領されてしまう。

「どうしたの？ さっきから黙り込んで？」

「うるさい！」

健一の怒鳴り声に沙苗の動きが止まる。

健一はこの後、酷く後悔した。

第6話 彼女カラノ警告

お互い無言のまま数分が経過した。健一は沙苗に先程の事を謝ろうと思っではいるのだが、言葉が出てこない。沙苗は俯いたまま何も喋らなかった。うるさいと言われたのだから当然だろう。二人の間に気まずい空気が流れる。

「あのさ」

沈黙を破ったのは健一ではなく沙苗の方だった。

「もしかして、健ちゃんのお婆ちゃん亡くなったの？」

沙苗の言葉に健一の心臓が大きく鼓動した。「何で島に来たばかりなのに知ってるんだよ？」声にならない健一の一言はどうやら沙苗にも伝わったらしい。

「何でそう思ったかって？だって健ちゃんから何となく線香の臭いがするんだもの。間違ってたらごめんね、気を悪くしないで？」

「合ってるよ。昨日婆ちゃんが亡くなったんだ。」

ぴしやりと、悩むことなくはっきりと健一は断言した。先程まで祖母の死を認めたくない気持ちはあったが、聞かれたからには自分の口から祖母の死について言わなければならない。それは沙苗に対する返事というよりは自分自身に言い聞かせる為であった。それを聞いた沙苗は立ち止まると空を仰ぎ見た。

「そっか、亡くなっちゃったんだ。私、健ちゃんのお婆ちゃん好き

だったのになあ。誰にでも分け隔てなく接してくれて。もちろん私にも。」

沙苗は田村家の正統な跡継ぎである。元、田護家である田村の跡継ぎは特別扱いをされてきた。常に住民からは畏敬の念をもって接してくるため、その態度はどこか余所余所しい。沙苗もまた、あの時の健一と同じように、島に来る度皆の中に居ながら疎外感を感じていた。それに沙苗は、それ以外のある特別な理由から親族からそのような扱いを受けてきた。そんなこの島で唯一普通に接してくれたのが健一の祖母であった。早苗は健一の祖母の前ではどこにでも居る普通の女の子になることができた。そんなわけで沙苗は健一と祖母と一緒に過ごす時間を何よりも楽しみにしていたのだ。

もちろん健一も沙苗に普通に接していた。特別な理由も二人の間には関係ない。しかし、この島の子供達も沙苗を遠ざけていた。普通に接しているのは健一と、もう一人くらいだ。そのもう一人というのは――

「沙苗ー！何だもう来てたのか。今年は船が来るのが早かったんだなあ。」

向こうから悠樹が走ってきた。悠樹こそがそのもう一人である。悠樹の両親や祖父母はもちろん沙苗を畏れ敬っている。しかし、悠樹はそんな人たちの中で育ちながらも、沙苗を「田村家」として見るのではなく、個人として見ていた。

「おう、悠樹おはよう。」

「健一か。昨日はその…色々大変だったみたいだな。いいのか？その、こんな所に居て。通夜の準備とか…色々あるんじゃないのか？」

悠樹は健一の祖母が亡くなったことを知っているようだ。小さな島だ、それくらいのはすぐ島中に伝わってしまうのかもしれない。

「ああ、いいんだ。今日の祭りの関係で通夜は明日だから。それに『沙苗を迎えに行け』って婆ちゃんの遺言だったし。」

健一はもう、祖母の死について言うことを躊躇わなくなった。いつまでも悲しんでいると、きっと祖母も浮かばれないだろう、それが健一の結論だった。

「沙苗、ありがとう。沙苗のおかげで遺言を叶えることが出来たよ。」

「そんな、私は何もしてないんだからお礼なんていいわよ。」

沙苗は目頭が熱くなるのが分かり、慌てて顔をハンカチで覆った。死ぬ間際まで沙苗の事を気遣ってくれたのが嬉しくて、しかしお礼を言いたくても言えないのが悲しくて――複雑な気持ちであった。

「悠樹ー！！家の手伝いもしないで朝から何やってるだー！！」

突然、遠くの方で悠樹を呼ぶ声がした。

声のした方を見ると、悠樹の祖父が軽トラックから身を乗り出し、こちらに向かって叫んでいた。

「やべ、皆祭りの準備で家に居ないから家事やつとけって言われてたんだっけ。んじゃ、後でな。健一、沙苗。」

そう言うとう悠樹は祖父の元へと走っていった。軽トラに乗り込もう

としている悠樹に対し祖父は何か言っているようだ。声は聞こえずとも怒られているのは遠くから見ている健一と沙苗にも分かった。
やがて、こちらの視線に気付くと悠樹の祖父は、ばつが悪そうに
そっぽ外方を向き、悠樹に早く乗るように指示し、急いでその場から立ち去った。

「そういやさ、私を迎えに行くのってお婆ちゃんの遺言だって言ってたわよね？」

二人きりになったところで、沙苗は立ち止まり健一を見詰め、そう言った。

「あ、ああ。そうだけど……」

「他に何か遺言とかってあった？」

二人の間に重い空気が流れる。

「無いよ。でも何でそんなこと聞——」

「じゃあ、何か大切な話があるとかお父さんから言われてない？」

健一の質問には答えず、沙苗は質問を続けた。

その声からは普段の早苗とは違い、威厳があり、健一は蛇に睨まれた蛙のように立ちすくみ、沙苗の質問に答えざる終えなかった。

「言われたよ……」

「何て言われた？」

「内容はまだ：でも大切なことがあるからって」

「そう……」

沙苗は健一から目を逸らし、何かを考えるように下を向いた。健一は、沙苗が目を逸らしたことにより、見えない呪縛から解放された。健一には分からなかった。何故沙苗がそんな事を聞くのか。

「何で、何でそんなこと聞くんだよ!!」

何も答えてはくれない沙苗への苛立ちが怒鳴り声となって現れる。しかし沙苗はそれを聞いても冷徹なまでに冷静に、健一を見詰めた。その冷ややかな眼差しに健一の方が怯んでしまう。

「ごめんなさい、今は何も言えないの。何も無いまま時が流れてくれた方がいいから。でも、これから何か聞かされて、それが約束事であれば必ず守った方がいいわ。これは忠告じゃなくて警告よ。友達として、そして田護家：現田村家の跡取りとして貴方に警告します。」

あんなに嫌っていた自分の立場を強調して、彼女はそう言った。

第7話 祭ノ晩二

「ほら、健一。祭りが始まる時間だぞ？ 今日くらいは色々忘れて友達と遊んで来い。」

健一は父の言葉に従い、祭りが行われている広場に行くところには島中の人達が殆んど集まっていた。その中に悠樹の姿を見つけ、背後からそっと近づく。

あと三步、あと二歩、一歩……のところで悠樹はくると振り返った。

「おいおい、足音でバレバレだぜ？」

悠樹は人を小馬鹿にするような嫌な笑いを浮かべた。健一は昨日の仕返しが出来ずに不満そうな表情を浮かべる。二人はそのまま見詰めた。そして声を上げて笑った。

ドン！！

その時、広場の中心から太鼓の音が聞こえた。「ドン！ドン！」と次第に大きく、力強く太鼓の音が響き渡る。

「あ、始まったぜ、沙苗の演舞！ ほら、行こうぜ健一。」

健一は一瞬だけ躊躇した。冷たい眼差しで警告を言い渡した沙苗の顔が頭に浮かぶと、健一はそれだけでその場から動けなくなった。あの沙苗の姿をこれから見に行くのだと考えると、金縛りにあったように体が硬くなり、呼吸も苦しくなってくる。

「いや、俺は…」

「ほら、行くぞ！」

健一の声は太鼓の音と歓声とに掻き消され、悠樹には届かなかった。悠樹は健一の腕を掴むと、ぐいぐいと引っ張りながら、人込みを掻き分け人だかりの中心へと向かってゆく。

「おい、悠樹！俺は——」

その声は中心に進めば進むほど他の声に掻き消され、悠樹の耳には全く届かなくなっていた。悠樹は見えない糸で引っ張られるかのように沙苗の所を目指す。そんな悠樹の横顔にも健一は恐怖を覚えた。やがて景色が開け、沙苗が巫女装束に身を包み、神楽を舞っていた。やがて沙苗はその動きを止め、懷から短刀を取り出しそれを天に向かい、両手で掲げた。

『高天原に御座しまする神々よ！実らぬ願いを聞き入れ、我々をお救いになると言うのなら、私はこの命も惜しまずに捧げまする！！』

沙苗は掲げた短刀を両手で握り、自分の胸へと突き刺す…ふりをした。そしてその場に倒れこむ。倒れこんだ沙苗を神官の格好をした大人達数名が舞台裏へと運んだ。

神官たちはその後、沙苗が倒れていた場所に花と、そして穀物を添えた。

皆はそれに向かい手を合わせ、毎年恒例の行事は終わった。

「なあ、悠樹。あれってどんな意味があるんだ？」

舞に見とれ、様々な恐怖から一時的に解放された健一は素朴な疑問を口にした。

「ん？ ああ、俺も詳しい事は良く分かんないんだよ。でも生贄とか——」

「そうそう、生贄ってのは正解ね？」

舞を終えた沙苗が巫女姿のまま突然話しに加わってきた。その姿に健一は背筋が寒くなるのを感じたが、そこにいる沙苗がいつもの、健一が知っている沙苗だと分かるとホッと胸を撫で下ろし、いつも通りに接した。

「なあ、沙苗。お前なら詳しい事知ってるだろ？ 田護家の人間なんだしさ。」

「もう、健ちゃんてば。‘田護’って苗字嫌いなもの知ってるくせに——」

冗談ばく、無邪気な笑顔で沙苗はそう言った。

「でも、せっかくだから教えてあげるわ。」

彼女の話によると、これは悠樹が言っていたとおり元は生贄を捧げるための儀式だったという。

生贄を捧げ、作物があまり育たぬこの島の五穀豊穡を願う——その大元は日本神話から来ていたらしく、巫女が死んだ場所から作物を供えるという行為は死体から作物が生えてくるということに繋が^{すさのお}り、それは須佐之男^{すさののお}が^{おおげつのひめ}大気都比売を殺すと稲や粟、麦などが生えてきた事に由来する。

元来、生贄も自ら進んで贄となるのではなくランダムに選ばれ、強制的に殺されてきた。しかも、穢れを知らぬ少女ばかりがだ。その少女達がいつしか巫女に繋がり、人が殺すより自害の方が良いとされ、このような形に落ち着いた。戦後間もない頃までは本当に生贄が捧げられていたらしいが、現代ではそんなことは許されないので、祭りという形で形式だけ残っているというわけだ。

「どう、分かった？」

「うん、悠樹なんかより全然当てになるつか、流石だぜ。」

「おい、何か言ったか？」

3人は意味もなく顔を見合わせて笑ったが、沙苗の笑顔はどこか寂しそうだった。

「さ、沙苗も用が済んだようだしさ出店行って何か喰おうぜ！」

悠樹がそう声をかけ走り出すと、続けて健一も走り出した。

一人その場に残された沙苗は二人の背中を、またあの寂しそうな笑顔で見ていた。

「もし……もし、本当のことを知ってしまったのなら、祭りなんてやっていけないわね……」

彼女の独り言が彼らに聞こえるはずもなく、彼らは無邪気に彼女を「早く来い」と呼ぶのだった。

彼女は駆け出した。全てを振り払うかのように。

健一はこの時忘れていた。祖母の死なんて頭の片隅にもなくなっていた。

忘れていなければ、いつも通りにはしゃげるはずがない。

しかし、健一は最初からもっと重要な何かを忘れていたのだ。それは夢の中に鍵が隠され、健一は未だに勘違いをしたまま今を過ごしている。

それに気付くのは、もう少しあとの話である。

第8話 理不尽ナ約束

祭りも終わり、健一が家に帰ると父が祖母の死体の前に座り手招きをしていた。この時、健一は忘れていた祖母の死をようやく思い出した。

大好きだった祖母の死を何故自分は今まで忘れていたのかと自分自身に怒りを感じたが、忘れてしまうほど楽しい時を過ごせ、祖母もいつまでも悲しんでいるよりは喜んでくれているだろうと自分に言い訳をした。

「ここに座りなさい。」

父に促され、父と同じように健一は祖母の死体の前に座った。

「父さん昨日大事な話があるって言ったのは憶えてるね？色々終わったあとでもいいと思ったんだが…万が一のこともあるかも知れないから、今のうちに話しておくよ。いいね？」

健一は頷いた。

「2つ約束して欲しい事があるんだ。一つ目は約束と言うより強制だな。健一、お前は高校は本土の私立校に行く事になってたと思う。でも、それをやめてこの島の高校に行ってくれないか？」

「な、何でだよ！！」

父の言葉に健一は動揺せざるおえなかった。本土の学校へ行く事は前から決まっていたことである。それを此処へ来て覆されるなど予想だにしなかったのだから動揺するのも当然であろう。

「そんなのって……理由は、理由は何なんだよ!!」

「ごめんな健一、理由は言えない。言っではいけない決まりなんだ。」

「何だよ決まりって!!」

健一がいくら強い口調で問い詰めようと、父は何も答えなかった。決まったことだけで、何故そうなるのか納得のいく理由を教えてください。健一に対し、健一の苛立ちは募る一方だった。

「嫌だ。」

いつまで経っても自分の疑問に答えてくれない父に健一は冷たく言い放った。

「嫌だね。理由も教えてくれないのに行くななんて。俺は行く。金のことならバイトとかするし。理由も知らず諦める奴なんていねえよ。」

そう言うのと部屋から出て行こうとした。を慌てて父がその腕掴む。

「まだ話は終わってない。2つ目の約束があるんだ。」

「もうしらねえよ! どうせ理不尽な事理由も言わずに突きつけるんだろ! 聞く価値もないね!!」

父の手を振り払い、足早に立ち去ろうとする健一に、父が後ろから声をかけた。

「父さんが居ない時は、絶対に島から出るなよ!!」

健一はその言葉に何の反応も示すことなく部屋へと戻った。

本土の高校へ行くのを諦めろということは夢を諦めろと言われたようなものである。

健一には夢があった。私立校で大学を目指して勉強し、医者になろうと思っていたのだ。そして、いずれ稲櫛島に戻ってきて、この島の病院をもっと立派なものにしたいと思っていた。父のようにお世話になった島民の為に何かしたい、と。

しかしその夢を絶たれてしまったのだ。この島の小さな高校では将来の夢に近づけるかどうかと聞かれれば絶望的だと答えるしかない。

「あーあ、何なんだよ。胸糞悪いぜ。」

今まで父は健一の言う事に反対した事はなかった。甘やかされていたというわけでもないが、反対しなければいけない理由が何かあるときはちゃんと説明をし、健一を納得させてくれた。

したがって健一は理不尽事になれていなかった。味方だと思っていた人に裏切られたようなショックと、怒りを覚えていた。

「もう暫く言う事なんか聞くものか。」

健一はポツリと呟いた。

*

その後、通夜も葬式も何事もなく無事に終わった。神葬祭なので沙苗とその祖母が拝みに来た。島中の人達が手を合わせに来てくれたため、健一の父は忙しそうに動いていた。

そんな中健一は祖母の死体の前に座ったまま動かず、死体が火葬されてしまうと霊璽の前から動かなかった。

埋葬祭も清祓の儀もその日のうちに済ませてしまい、祖母がそこに居た事を示すものは柵の上に置かれた写真しかなくなった。

父の話によると100日祭も1年祭もやらないという。健一はこの話を父から聞いたわけではなかった。何故なら健一はあの日から父とは一言も口を利いていない。このことは悠樹がそれとなく健一に教えてくれた事である。

健一はこれを聞いてさらに激怒した。自分達を支えてくれた祖母をどうして丁寧に弔ってやらないのかと。父に詰め寄ってみたが、やはり何も答えてはくれず、健一の父への怒りは溜まってゆく一方だった。

祖母が亡くなってから健一の家はがらりとその雰囲気を変えてしまった。以前のような和気藹々とした和やかなものは何処にもなく、同じ家に暮らしながらも別々の方向を向いている父と息子がいるだけである。

葬式から3日が経った。

未だに親子間の溝は埋まっておらず平行を保ったままのような状態であった。健一は部屋に引きこもり、父が仕事へ行くと部屋から出てくる。唯一顔を合わせる場となってしまった夕食でも、お互いに口を利くことが無かった。

この日も父が仕事へと出掛けて行ったのを確認すると、健一は部屋から出てきて朝食を求め台所へ行った。

——と、その時居間に置いてある電話が鳴った。健一が面倒臭いと

思いながら渋々受話器を取ると、その相手は悠樹であった。

「よ、健一。おはよーさん。」

「どうしたよ、まだ7時半だと言うのに。」

「いや実はさ、これから受験勉強の息抜きに一緒に冒険へ行かないかと思ってねえ。」

「別にいいけど…どこへ行くんだ？」

「さあ、まだ教えないね。話は港に来てからだ。じゃあな。」

そう言うのと電話は一方的に切れた。

健一は思った。港へ来いと言う事は島から出るということなのでは無いか、と。

父は今島に居ない。ふと、父との約束が頭を過ぎったが、それは一瞬のことであった。

―何が約束だよ、あんな一方的なの―

健一はちよつとした反抗心から約束をやぶってやろうと思った。

父が不在の間に島の外へ出てやろうと。

第9話 禁ヲ犯ス

健一が港へ行くと、其処にはもう悠樹が退屈そうに待っていた。

「遅いよー、まったく。」

「ごめんごめん、まだ電話に出たとき寝巻きでさ、朝食も食べてなくて。で、どこへ行くんだ？」

悠樹は答える代わりに健一の腕を引っ張り無言のまま海岸沿いを歩き出した。腕を引っ張られているので健一も歩かざるおえない。悠樹の足はどんどん速くなり、小走りになった。健一も転びそうになりながら付いてゆく。

それから数分後、悠樹が急に立ち止まった。健一があたりを見渡すと、そこは何の変哲も無い岩場であった。

「悠樹、何のつもりだよ。よりもよって何にも無いところなんて。」

悠樹は無言のまますぐ傍の一際大きな岩を指差した。一見何の変哲も無い岩だが、良く見るとその陰に波に揺られちらちらと見える物体があった。近づいてみるとそれは一隻のボートだった。

悠樹は健一の驚く顔を見てにやりと笑った。

「驚いたか？祖父ちゃんのボートなんだぜ？これあの、例の島、に行ってみようぜ！」

例の島とは、この島から出て船で15分ほど本土とは反対方向へ向かうと、ぼんやりと見えてくる島の事である。

島民はこの島のことを知ってか知らずか誰も口にしない。無人の島だという事だけは分かっているが、何時だったか健一と悠樹が前にもボートをくすねて島の周りを一周してみたことがあった。

その時、無人のはずの島に何か建物のようなものが見えたのだ。この頃の悠樹と健一に島に降りてまで探索する勇気は無かった。しかし二人はそれを見た頃からその建物が何なのか気になって気になって仕方なかった。

その謎の建物の正体を今日突き止めに行こうというわけだ。

悠樹は足早にボートに乗り込んだ。健一もその後が続く。健一の脳裏には父との約束の事などもう微塵も無かった。

「健一、あの日のこと憶えてるか？」

「ん、あの日って例の島に前行った日の事か？」

海風に吹かれながら島へ着くまでの間、二人は前に例の島へ来た時の事を思い出していた。

「あの日はさ、帰ったら散々怒られたよな。」

「ああ、苗の婆ちゃんが特に御冠でさ。俺の親父とお前の両親が苗の婆ちゃんに何回も頭下げてさ。その後俺も親父からこつてり絞られて。思えばあの日帰った途端に見つかったのがまずかったよなあ。」

もう遠い昔の事のように話す健一に、悠樹はうんうんと頷いた。

「でもさ、苗の婆ちゃんか怒ったからこそ俺は確信しちゃったんだよね。あの島、絶対なんかあるって。」

あれこれと話している間に、無事に例の島に着いた。

ボートを海岸にあげ、念のために木にボートをつないでおくことにした。その作業中、ふと健一が顔をあげると木々の中に人影のようなものが動いた。

「悠樹、あれ！」

健一の声に悠樹が顔をあげ健一が指差す方を見たが、そこには誰も居らず、草木が風に吹かれ揺れているだけであった。

「どうしたんだよ？」

「いや、さっき其処に人影が見えた気はしたんだけど…気のせいだったかな？」

「お前、何だもうビビってるのか？まあ、念のため人影が見えたところを通ってくか。」

二人は健一が人影が見えたと言った場所から島の中心に向かうことにした。草を掻き分け、道なき道を、ひたすら島の中央を目指して歩いてゆく。

中央に行けば何かがあると、そう信じて二人はひたすら歩いた。

此処は大きな島ではない。目当ての建物はすぐに見つかった。

その建物はボートを止めた反対側の海岸からの方が近かったが、二人はそんなことなどまったく気にしていない。何故ならずと頭の片隅に引っ掛かっていた謎の建物が間近で見られただけで二人は満足していた。

建物は中途半端に半分だけ壊れていた。残っている部分には蔦が絡まっており、窓らしき部分には何故か鉄格子がある。半壊したところから内部を覗くと建物の内部もやはり鉄格子によって区切られていた。

「そうか、そういうことだったのか。」

悠樹がポツリと呟き、内部を更に詳しく調べ始めた。瓦礫をどかしたり、壁を隅々まで見たりと、忙しく動き回る。一方、健一は悠樹が何を調べているのか分からず、悠樹の真似をして辺りを散策していた。

ふと――瓦礫の隙間にある黒いものが目に止まった。健一は隙間に手を突っ込みそれを取り出した。‘それ’は一冊の手帳であった。雨風に晒され、かなり風化している。捲る傍からページもとれてしまい、インクも薄れていて何がかいてあるのか分からない状態であった。しかし、それでもめげずにページを捲っていると、ちょうど真ん中の1ページに書かれている文字が辛うじて読めた。

「ん？『今日、皆処分ス』…？」

そこにはこう書かれていた。

『今日、皆処分ス。此処ニ収容サレシ者、此処デ息絶エ、ソシテ私モマタ。一人ガ絶命シ、ソシテマタ一人ト減ツテユク。ソレモ今日デ終ワリニシヨウ。同ジ収容サレテイル身デアリナガラ後始末ヲ任サレルトハ残酷ナ運命トシカ言エナイ。』

「えっと…『監視役、タゴ』…タゴ？タゴってまさか田護！？」

その名を口にした途端、風が吹き、そのページは千切れ、風にさらわれた。

第10話 何モ言ワナイ、ソシテ言エナイ

「思ったとおりだ。この島は稲櫛島の‘暗黒史’、てなわけか。ど
ーりで隠したがるはずだぜ。」

悠樹の声で健一は我に返った。いや、現実には引き戻されたと言うべ
きだろう。悠樹の言うとおり、この島での出来事を稲櫛島の人々が
隠しているのだとすれば、これを知った自分たちはただでは済まな
いのではないか、と。島民の中でも一部の人間しか知らない事実を
知ってしまったのであれば――

「悠樹、帰ろう！今すぐに！！」

その先は考えたくなかった。そう言うや否や走り出す。悠樹も同じ
考えに至ったのか、頷くと同時にボートの泊めてある方向を目指し
て一目散に走り出した。

風のように通り過ぎる景色の中で、健一はあるものを目にした。そ
れは夢の中でみたような真っ赤な鳥居であった。

あの場所から二人は逃げるように立ち去り、無事に稲櫛島へと帰
ってきた。どうやって此処まで辿りついたのか二人は記憶が無い。
それほど焦っていたのだ。しかし、不幸中の幸いというべきか、二
人が港に着いた時、港には昼間だというのに誰一人居なかった。こ
れでボートを無断で乗り出し、あの島へ行った事もバレないと二人
はほっと胸を撫で下ろした。

「今日はもう帰ろうか。なんかどつと疲れちゃったし。」

「お、おう。じゃあな。」

二人は足早に帰路についた。まるで二人で居た事を隠すかのように……。

健一が家に着くと、父はまだ帰ってきておらず家の中には誰も居なかった。健一は約束を破った事が父にばれていないと、またもや胸を撫で下ろした。

にも関わらず、得体の知れない恐怖と不安が健一の中で渦巻いていた。自分はとんでもない過ちを犯してしまったのではないかという不安に囚われ、父の不在も仕事以外の何か他の理由で帰ってこないのではないかと、ますます不安になる。

あの夜から父のことなど知るものかと思っていたが、今はそんなことを言う気にはなれなかった。その得体の知れない感情を振り払うかのように、健一は自分の部屋に入ると布団にもぐりこんだ。

「お母さんが、亡くなった…？」

健一は父から知らされた母の訃報をこの時よく理解できなかった。これは健一の祖父が亡くなってから丁度1年後の話。本土から戻ってきた父は健一にこう告げた。健一は暫くの間理解できず、ぼーっとその場に立ち尽くしていた。

父が背を向け、立ち去ろうとした時、健一はやっこの思いで言葉を発した。

「お母さんに会いたい。」

父はその言葉にゆっくりと振り返った。「駄目だ」と否定するその声はどこか弱々しく、顔面は蒼白であった。

「今のは…夢？」

夢から覚め、健一は伏せていた顔をあげた。時計は午後七時を告げている。生々しいくらいリアルな夢……それは夢ではなく過去にあった出来事だった。

祖父が亡くなった1年後に母が亡くなった。どんなに父と母が喧嘩をして自分も辛い思いをしても健一にとって代わりの無いたった一人の母親だった。健一は母の顔を永遠の別れの前に一目見たかった。にも関わらず父はそれを否定し、自分も会いに行こうとしなかった。健一はこの時、初めて父に対して怒りを感じた。今と同じように暫くの間父と口を利かなかった。

「父さんはいつだってそうだ。」

健一の大きな声での独り言。

「父さんは、いつだって肝心な事は何も言わずに隠してるんだ。」

ふと、‘父’という言葉が引っ掛かった。時計は午後七時を指している。つまり父がとくに帰ってきている時間である。にも関わらず1階からは人の気配も物音も何もしない。

心配ではあったが、変なところで意地を張り健一は知らぬふりをしていた。

それから、2時間が経過しても父は帰ってこなかった。時計の針は9時を指している。港に船は着いている筈なのに父が帰ってこないという状況に、健一は次第に不安に、そして心配になった。

―港に様子を見に行こう―

そう思い、部屋から出て、玄関へ向かい、そこで靴を履いている、ちょうどその時であった。

ガラガラガラ！！

勢い良く玄関の戸が開いたかと思うと、そこには父が立っていた。その顔は夢に見た父の顔より蒼白であり、具合が悪そうであった。

「な…と、父さん…どうしたんだよ。」

「おま…え…や…そ…く…破…たな…」

そう言って父は健一の上に倒れこんだ。健一は慌てて父を支えた。そして、父の後ろにはずぶ濡れの沙苗が立っていた。雨が降っているわけでもないのにずぶ濡れ…そして父の具合、何かがおかしい。

「どうしたんだよ、沙苗！一体何があったんだよ！！」

「……た…わね」

その声は小さく、震えていて良く聞き取れない。

「今なんて…」

「約束を破ったわね!!!」

その声は静寂の中突如響き渡る雷のようであった。

第11話 約束破リノ罪

「約束って……約束って何だよ！それってそんな重要だったのかよ！！」

「私は約束を守れって、警告、した筈よ。」

健一は何が何だか分からなかった。どうして沙苗がこんなに怒っているのかも、何故父がこんな状態なのかも理解する事が出来ない。こうしている間にも父の顔色はどんどん悪くなってゆく。

「どうして、どうして多寡^{たか}が約束くらいでこんな事に！！」

「……」

沙苗は黙り込んだ。そして健一をまじまじと見詰める。

「もしかして…何も知らないの？」

——その時、居間の方から窓ガラスが割れる音がした。

健一は何事かと様子を見に行こうとする。その手を掴み、沙苗が止めた。

「此処に居ては危険だわ。家から出て裏山へ行くわよ！」

「んなこと言ったって、父さんはどうするんだよ！！」

「……その人のせいで貴方がこんな思いをしてるのに？」

その瞬間健一は頭が真っ白になった。

―父のせいで自分がこんな思いをしている？―

沙苗が何を言っているか分からない。全身から力が抜け、思考も止まる。それを好機と見たのか沙苗は健一に「走れ」と命令した。頭が真っ白になっている健一は沙苗の思惑通りその命令を丸呑みし、言葉どおり走り出した。脇目も振らず、何が一体危険なのか考えず、その場所に父親を残したまま、ただひたすら裏山へ向かい走った。

健一が我に返ると、そこは裏山にある神社の御堂の中であった。息は上がり、此処まで走った事と訳も分からぬ恐怖で健一は汗だくになっていた。

一切明かりが無い暗闇の中、かろうじて気配だけで隣に誰か居るのが分かった。恐らく隣に居るのは沙苗であろうと健一は思っていたが、それは違っていた。

健一の意に反して沙苗の声はすぐ前から聞こえた。

「二人とも無事？」

「ああ…」

健一の隣からした声は悠樹のものであった。一番親しい友人がすぐ隣に居るということで、健一は少しだけ落ち着きを取り戻した。

「悠ちゃん、何故貴方が追われてるか分かってる？」

「ああ、あの島のことだよな…」

悠樹は力なく答えた。

「じゃあ次は健ちゃんね。何で狙われてるか分かる？」

「島に入ったことと、約束を守らなかったこと…なあ、じゃあ何で父さんまであんな目に!!」

沙苗は何も言わない。そのまま数秒後、部屋に灯りが点った。それは沙苗がもってきた蠟燭の火であった。

「流石に此処まで追っては来ないわね。まあ、崇り、ならここで健ちゃんが倒れてもおかしくないんだけどね。私、人為的なもの以外に干渉できないし。」

「崇りって何だよ!多寡が約束破ったくらいで!何でだよ!!」

蠟燭の灯りに照らされた沙苗の顔は冷たい表情で健一を見ていた。

「ねえ、健ちゃん。此処が何処だか分かるよね？」

「山の中腹の神社の御堂の中だろ…それが何——」

「じゃあ、もっと上に小さな鳥居と祠があるのは知ってる？」

その言葉を聞いた途端、健一の心臓がドクリと大きく鼓動した。つい最近、何日か前に見た夢に出てきた真っ赤な鳥居と小さな祠。健一にはあれがただの夢だとは思えなかった。しかし、実在しているとはつきり肯定されると、怖くなった。何故自分はその場所を知っているのか、そして何故父があの場合にいたのか——先刻よりもっと大きな不安に襲われる。

悠樹は健一が聞いたとき、知らないと言った。健一が悠樹の方を振り向くと、彼は青ざめた顔をしていた。健一と目が合うと膝を抱え震え出す。

「ごめん。俺知ってたんだ。お前が聞いてきた祠の事。でもあの祠の事を話すのはタブーなんだよ、だから俺…嘘を…ごめん。」

悠樹は顔を膝にうずめ、声を上げずに泣きだした。肩が小刻みに震えているので、彼が泣いているということに二人はすぐに気付いた。

「そうよ、悠ちゃんの言うとおり。あの鳥居と祠についてはこの島のタブーなの。あれは特別な願い事をする為にあるのよ。そしてそれは‘絶対’に叶うの。でも、特別な願いには特別な対価が必要なの。それを守らなければ崇られてしまう。そう、願い事をした本人だけでは事が済まないの。それはその人の親族まで及ぶわ。」

健一はその祠に願い事をした記憶など無い。ということは、父か祖母がした事になる。いや、きっと願い事をしたのは父である。祖母はそれらしいことを言っていなかった。父が言った‘約束’とは、祠に掛けた願い事と何か関係しているのではないか？

——と、ここで一つ疑問が浮かんだ。

「どうして祠に願い事をするくらいで呪われなきゃなんだよ。そんなの誰だってすることじゃないか。仮に‘絶対’に願いが叶ったとしても、その対価を守らなければ崇られるなんておかしいじゃないか！」

「いいえ、おかしくなんかいいわ。」

ぴしゃりと、沙苗が言う。

「対価を必要としてまで叶えたい願い……それはね、賽銭箱に五円や十円納めて叶えるような願いとはわけが違うのよ。絶対に、どうしても、どんな手段を使おうとも叶えたい願い——それって限られてるじゃない？ 叶っても公にしたくない、自分の手柄にもしたくない。人に見つかりたくない。そんな願いって言うのはね……」

沙苗は目を閉じた。

そしてゆっくりと目を開く。

「殺人だけよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364e/>

禁忌の鳥居

2010年10月12日06時03分発行